

青山教会会報

「逆転」

ダニエル書九章一八一―一九節
ルカによる福音書一八章九―一四節

牧師 増田将平

神殿で二人の人が祈っています。「ファリサイ派」は聖書を熱心に研究し、聖書の言葉通りに生きるために日々努力している人々です。尊敬されていました。一方の徴税人は、イスラエルを支配していたローマ帝国の税金を取り立てる仕事に従事する人です。支配者の傘の下で税金を取り立てます。徴税人は税金のノルマを達成すると気の向くままに上前をはね、私服を肥やすことができました。不正が公然と行われていた職業でしたから、当然人々から忌み嫌われていました。この後でもう一人徴税人が登場します。その名は「ザアカイ」。イエス様が町に来た時に、彼はお姿を見たいと思ったのですが、人々から邪魔されて仕方なくいちじく桑の木に登るのです。

ファリサイ派の人が感謝の祈りをささげています。その内容は、自分が十戒に違反しているような人間ではないこと、「わたしはあの徴税人のような者ではない」と、さらに自分の良い行いをアピールして神に感謝します。彼は自分が正しい人間であることを自負しています。その正しさは、他の人々との比較によって位置付けられています。そのため、祈っている時には見えていないはずの徴税人の姿がはつきり見えるのです。

この人はうぬぼれていました。漢字で「自惚れ」「自分に惚れる」と書きます。「わたしは、正しい人間だなあ」と、自分で判断して安心しているのです。「正しさ」を聖書では「義」という言葉で表現することがあります。「義」は今朝のたとえ話の鍵となる言葉です。「義」とは、「神様の正しさ」という意味です。何が正しくて、何が悪いかを判断するのは、人ではなく、神なのです。人間が、自分を中心にして、何が善で悪であるかを判断する、ここに、あらゆる悲惨の源があり、それを聖書は「罪」と呼びます。「自惚れる」という聖書という言葉は興味深いことに「依り頼む」という意味もあるそうです。なるほど、自惚れている人は、

自分により頼んでいます。自分が正しい人間であることを、自分で決めている。そういう人は、神により頼む必要はなく、神なしでも生きていけるということになりました。「義」という言葉は「神の正しさ」という意味の他にもう一つの意味があります。「神様との正しい関係」です。この人は祈りで「神様」と呼びかけてはいますが、神様を無視しています。結局自分に向かって、自分に祈っているのです。再び思い起こしたいことは、ファリサイ派は、聖書に従って生きようと願った真面目な人々であるということです。最初は神のために行っていたことが、いつの間にか自分のためになり、神のことを思っているつもりが、自分のことを思っているという倒錯が起きる。アメリカ独立記念日での礼拝説教で、こういう言葉を聞きました。「国家の独立は大切ですが、私どもは神から独立して生きようとしてはなりません。むしろ、神に依り頼んで生きるのです。」

今朝の箇所は「たとえ話」です。誰のためのたとえ話かと言えば、「自分は正しい人間だと自惚れて、他人を見下している人々」に対してです。それは誰のことか。たとえ話の中ではファリサイ派の

ことでしょう。でも主イエスが語りかけていたのは弟子たちです。弟子たちの中に、自分は正しい人間だという自惚れがあり、他人を見下す心があったのです。「弟子たちの中で誰が一番偉いかという議論が起きた」と八章にあります。一度だけではありません。主イエスが捉えられ、十字架につけられる日が近づいている時にも、弟子たちの間で「自分たちのうちで誰が一番偉いだろうか」という議論も起こったのです。「人よりも偉くなりたい」という思いは「他人を見下す」と思いと表裏一体です。彼らはこのわたしと無関係でしょうか。私どもは「自分はこのフアリサイ派のような人間でもないし、弟子たちのような人間でもないことを感謝します」と思いたいのではないのでしょうか。このたとえ話は私どもへの言葉でもあります。

「罪人です」この人は神様を見上げることができません。しかしその心はまっすぐに神様に向いていました。フアリサイ派の人は神により頼まずに、自分により頼みました。自分は正しいことをしているから、神により頼む必要はないのです。一方の徴税人は、自分により頼むことができない。自分の悪を知っていたので、神により頼む他はありません。この直後に主イエスは当時軽んじられていた子供たちを祝福されています。主は言われました。「子供のように入ることにはできない」「子供のように入ることにより頼むことなく、父なる神により頼むことです。」

この話の結末は意外です。なぜ何も良いことができず、懺悔するほかない人が、神から「義とされた」のでしょうか。その答えが十字架です。主イエスは「医者が必要なのは健康な人ではなく病人である」と言われました。「わたしが来たのは、罪人を招いて悔い改めさせるためである」とも言われました。「悔い改めた人を招く」のではなく「悔い改めさせるために招く」と言われたのです。この後で主イエスは、不正に富を蓄え、嫌われていた徴税人ザアカイの家に来られました。彼が反省して悔い改め、立派な行いをしたからではありません。主イエスが一方的に彼を訪ね、ザアカイは罪の赦しを頂いたからこそ、ザアカイは悔い改め、人のため、神のために生きる人生を始めることができたのです。

（三月五日主日礼拝説教）